

稲葉俊郎

山と音楽と聖域

松 本には学生のころから毎年通い続けています。大学生の時、山岳部に入り、長野の山や自然の虜になったのです。毎週末、北アルプスの登山をしました。お金がないときは、東京から上高地まで自転車で行っていただほどです。山への恋に落ちました。山はいつも寡黙でしたが、すべてを受け入れてくれる存在でした。東大のOBが1960（昭和35）年から続けている東大涸沢診療所（涸沢ヒュッテ横に併設）が山の中にあります。医師と学生が当番制で7～8月に常駐しています。毎年100人ほどの患者さんが訪れ、高山病、外傷、火傷（テント内で負傷するのです！）などを診ます。夏は診療所にいり浸り、穂高、槍、常念など、山を駆け回っていました。山は夏の顔だけではありません。秋には万華鏡のように色彩が踊る秋の表情があり、冬には静謐で墨絵のような厳しい冬の表情があり、春には冬に耐え忍んだエネルギーを爆発させた歓喜に満ちた春の表情があります。四季に応じて違う表情があり、人類誕生以前の悠久の過去から延々と繰り返されてきました。四季の変化を全身で体感するように長野の山を登りました。そして、夏にはサイトウキネン（現：セイジ・オザワ松本フェスティバルOMF）にも足を運び、山でほどけた身体を凝縮させ再構成していくように、音楽の波動に身をゆだねました。今年のOMFはマーラー「交響曲 第9番 二長調」（指揮：ファビオ・ルイージ）。古典と前衛、伝統と逸脱、過去の自作をコラージュのように引用に次ぐ引用。同じテーマを繰り返さず、テレビのチャンネルを替えるように曲の雰囲気が変わる不思議な交響曲でした。生命だけではなく死の香りすら感じたのは、マーラーが自分の死を予感し織り込んでいたからでしょうか。あらゆる要素が多様性と共に乱立しながら、カオスのまま調和を保っている現代を強く引き受けた結果の作品かもしれないと思いました。

松本という土地で、体を山に育ててもらい、心を音楽に育ててもらいました。その恩返しとして学生の時から20年近く、毎年夏になると東大涸沢診療所へ向かいます。そこは、忙しい都市生活で失われそうになる自分の全体性を取り戻すためにも大切な聖域なのです。



いなば・としろう
 医師、東京大学医学部付属病院循環器内科助教。
 1979年熊本生まれ。カテーテル治療や先天性心疾患が専門。往診による在宅医療や山岳医療にも従事（東大医学部山岳部監督）。2011年の東日本大震災をきっかけに、未来の医療の創発のためにさまざまな分野を横断した活動始める。
<https://www.toshiroinaba.com>